

## あなたの理想の最期とは？ 高橋伴明監督「痛くない死に方」

ピンク映画出身で「TATTOO〇〇〇〇刺青あり」（1982年）などで知られる高橋伴明監督。在宅医療の問題に切り込んだ最新作「痛くない死に方」が、3月5日からテアトル梅田などで公開される。「65歳ごろから自分の死を意識するようになった」という高橋監督が、若き医師、河田（柄本佑）の視点から自宅でのみとりに見つける。

在宅治療の末、対照的な最期を迎える2人の肺がん患者と家族、寄り添い続けようとする医師を巡る物語。患者の一人を「TATTOO」で主役を務めた宇崎童童が演じる。原作は兵庫県尼崎市で在宅診療に取り組む長尾和宏医師

の著書。病院での延命治療に疑問を呈し、95年から在宅医療として患者や家族と向き合ってきた長尾医師は「今の医療制度は患者思いとは言えない。一人でも多くの人が作品を見て声を上げてほしい」と話す。

連合赤軍事件や袴田事件など社会派作品も手がけた高橋監督は、死という重いテーマながら温かみのある作品に仕上げた。「前は敵を作って対抗姿勢をエネルギーにしていたが今は『こうあらねば』がなくなった。今の自分の『理想の死に方』を描いたが受け取り方は観客に委ねたい。重い話だが笑って見てもらえれば」【山下智子、写真も】



作品をPRする高橋伴明監督（右）と原作者の長尾和宏医師  
＝大阪市浪速区で